＜学界消息＞

◇第二回日本環境教育学会関西支部シンポジウム概要報告

5月15日（土）2時甲南大学10号館1021講義室。正面には『ゴミ問題とリサイクルを考える～環境教育の視点から』のテーマが浮かぶ。ほぼ満席に近い186名の参加を得てシンポジウムは始まった。以下、代表世話人赤尾氏の挨拶にはじまり、甲南大学の谷口シンポジウム実行委員長の閉会の言葉までを振り返って報告する。

＝プログラム＝

第一部　基調講演　槌田 劭氏（京都精華大学）

第二部　パネルディスカッション

コーディネーター　鈴木　善次氏（大阪教育大学）

パネリスト　松林　昭（京都光華小）、岩井　順一郎（豊中市立庄内公民館）、中院　彰子（ごみを考える会）、今井　左金吾（神戸市環境保健研究所）の各氏

槌田氏は工学部で教鞭を執られていた「技術畑」の方である。ところが、「技術」の限界を察知され、「使い捨て時代を考える会」を設立。真向から「技術」に対して「否定的」ともとれる発言をされる。これは、氏の著書「破壊にいたる工業的くらし」「工業社会の崩壊」～「農の再生・人の再生」という流れからも察せられよう。

「ゴミは現代文明の病理である」との指摘は誠に絶妙である。即ち、ゴミ問題を考えることは社会の健康状態を知ることに繋がるからである。そういう意味でゴミが出てきた時代を特定することが環境問題を考える上からも重要となろう。

「戦前戦後の日本にゴミ問題はあったか」にも関わってくるが、買い物袋を持って行き新聞紙に包んでもらう、調理屑の出ないよう工夫し、最終的に生ゴミは畑に埋める。新聞紙は燃焼させる。箪笥は頑丈で親から子へと引き継がれる。家も自転車も頑丈であった。着物は洗い張りをして仕立て直していた。そのような時代だった。

ところが現代は「使い捨ては美徳」「消費者は王様」という「流れ」に乗せられてしまっている。即ち、敗戦から学んだことが「禁欲」～「物欲」への脱皮であったことだ。この流れに乗って現代の教育がなされてきたと考えて見ると、そして被教育者が世論を形成して行ったと考えて見ると、一体原因は何に在るのだろうか。

経済の原理が生命の原理を呑み込んでしまったとも言えるであろう。ここにして、CMの果たしたマインドコントロール機能の重大さに気付かされるのである。私達はこうして、「生活の知恵」すら質的転換を迫られた――と言うよりも必要とされなくなったといってもいい――時代を完成させつつある。所謂、機械文明である。

従って、環境教育の現代に果たすべき役割は誠に多大であると言える。生命軽視、人間疎外の世界観を転換し、生存の基礎たる生命の原理にたちかえることこそ私達が目指す方向ではなかろうか。このことは、パネルディスカッションの中でも「心の育成の大切さ」（松林氏）、「ゴミに取り組む中での自覚の成長」（中院氏）、「行政が取り組みに一層工夫することの意義」（岩井氏）、「市民への啓発の大切さ」（今井氏）など皆さんが強調しておられたことである。

（関西支部世話人　福島　古）

◇日本環境教育学会関西支部の活動（1992年11月～1993年7月）

1992年11月　日本環境教育学会関西支部　第一回研究大会（前号に報告掲載）

○ワークショップの開催（話題提供者及びテーマ）

1993年

第23回（2／6）

松木　正（マザーアースエデュケーション

ディレクター）
「マザーアースエデュケーションについて」
ー母なる大地から学ぶ環境教育ー
第24回（3／28）
澤木昌典・戸田耿介（兵庫県人と自然の博物館）
「人と自然の博物館における環境教育」
第25回（4／17）
田中嘉明（奈良市立一条高等学校）
「民族と異文化」
第26回（6／19）
百瀬　稔（琵琶湖の水と大気を考える会）
「琵琶湖のゴルフ場を考える」
第27回（7／10）
「日本科学教育学会研究会平成5年度第1回研究会」を共催

○ニューズ・レターの発行（『関西ECOMAIL』）
第15号　1993.2
第16号　　7.1

※　関西支部ニューズ・レターは通信費（年間1000円）を納入の方にお届けします。ご希望の方は下記へお振込み下さい。
（振込先）郵便局「大阪9－37886」
「日本環境教育学会関西支部」
（関西支部　原田智代）

◇第5回日中科学教育セミナー（環境教育）と台湾の環境教育の状況

一昨年日本で開かれた本セミナーに続き、今回も環境教育をメインテーマに5月23日から27日にかけて台北師範大学を会場にして表記セミナーが持たれた。日本からは下沢隆氏（埼玉大学）を団長に私も含め10名が出席した。台湾側からは会場校の研究者をはじめ、台北師範学院や各地の大学、研究所のスタッフなど50名ほどの参加があった。このセミナーは台湾行政院国家科学委員会と日本の交流協会がスポンサーとなって開かれるものだが、今回の環境教育に対する台湾側の力の入れようは目をみはるものがあった。急激な経済成長の中で環境悪化が懸念される台湾では日本での公害教育と現在の環境教育がいっぺんに押し寄せたという感じであった。そのためか教員を養成する機関（小学校は師範学院、中・高は師範大学）には「環境教育中心（センター）」が必ず置かれており、学生や現職教員のための研修会、環境教育のための副読本や手引き書の発行を行っている。日本の大学に比べると積極的である。日本では各自治体の環境部や教育委員会、教育センターなどがその役割を果たしつつあるわけだが、大学にも是非ほしい組織機関である。なお、セミナーでも台湾側の発表はレベルの高いものであって、教わることが多かった。討論の中で印象的だったのは台湾でも学校教育の中に環境教育を浸透させていくときの壁として上級学校への進学準備があげられたことである。台湾も進学熱が盛んなようで、街のデパートの本屋に日本で馴染みの算数ドリル（中国語版）がずらっと並んでいる光景が目に飛び込んできた。なお、学校での環境教育の取り入れ方は日本の文部省の方針に似て各教科ごとのようである（融入式という）。　　（鈴木善次）

◇文部省重点領域研究「文明と環境」第11回公開シンポジウム「環境倫理と環境教育」に参加して

表記テーマのシンポジウムが平成5年6月26－27日の両日、青山学院大学総合研究所の大会議室で開かれた。これは京都にある国際日本文化研究センターに事務局を置く研究グループによって組織されたもので、今日の環境問題を文明というキーワードで考えようとしている。私もその考えに関心を示しており、環境教育は文明教育であるという主張を展開している。このシンポジウムでもそのような主旨で発言した。

シンポジウムの初日は伊東俊太郎氏（国際日本文化研究センター）の開会挨拶に始まり、沼田眞氏（本学会会長）の「生態学から見た環境教育」などの基調講演とパネルディスカッションが行われたが環境問題の解決を新たな技術開発をもとめるか、人々の意識改革に求めるかで意見が分かれた。二日目は環境倫理と環境教育についてそれぞれ二人の発表（私も含む）があり、そのあと阿部治氏（埼玉大学）もふくめたパネリストたちによる主題をめぐっての討論がなされた。その際、環

境倫理とか環境教育についての定義自体も問題になったが、両者をつなげたとき、「環境ファッシズム」が登場する危険性を指摘する声が聞かれ、今後の環境教育のありかたを考えるときの一つの問題として残された（これは私の「環境問題を考えるシンポの会場にクーラーが入っているが、切ったらどうか」という発言に関連して出されたもの）。さまざまな価値観を持つ人々の共通の理解を得る環境倫理をどう構築するか。本学会の課題でもある。

（鈴木善次）

◇日本科学教育学会研究会第６部会（環境教育）

表記研究会が下記のように開催され、それぞれ環境教育について活発な討論が行われた。

① 平成４年度
会場　北海道教育大学
日時　1993.2.4
主題「今、環境教育とは？」
一般報告
・高校物理履修実態調査　鶴岡森昭（札幌開成高）
・環境教育（家庭科関連）の生涯学習内容
酒向史代・谷口弘一（北海道教育大学）
・釧路湿原周辺丘陵地帯の森林植生の調査と考察
鈴木順雄・黒沢信道・杉沢拓男・阿部誠典・富井隆（ナショナルトラスト・サルン釧路委員会）
・小・中学校理科教科書における「雨冠」現象の記述と問題点　高橋庸哉（北海道教育大学）
・大雪山系をフィールドとした自然教室カリキュラムの適用
石山栄次（札幌市立三里塚小）・藤原祐介（札幌市立信濃小）・谷口弘一（北教大）
・レブンアツモリソウの生態と保護対策について
谷口弘一（北海道教育大学）
シンポジュウム「環境教育の現況と課題」
・司会　鈴木順雄（北海道教育大学）
・提案
環境科学の沿革と環境教育の目標
今堀宏三（大阪大学名誉教授）
環境教育のための情報Ｓサービス
中山和彦（筑波大学）
森林に学ぶ――教育情報システム開発研究の現状から
滝川貞夫（北海道大学）
学校教育・生涯学習のための環境教育の学習内容と項目
谷口弘一・鈴木順雄（北海道教育大学）

② 平成５年度研究会
（環境教育学会関西支部共催）
会場　大阪教育大学
日時　1993.7.10
主題「学校における環境教育・ＳＴＳ教育など総合分野の実践とその課題」
総合司会　野上智行（神戸大学）
一般報告
・小学校国語科における土をテーマにした環境学習　植田善太郎（泉大津市立条東小）
・中学校における環境教育――環境教育の実践とその課題　秋吉博之（兵庫教育大附属中）
・新時代に対応する国民的科学教育への模索――高校教育現場への「ＳＴＳ地球環境学」の導入
藤岡達也（大阪府立勝山高校）
・ＳＴＳ教育の視点にたった新カリキュラム物理Ⅱの「課題研究」の試み　川村康文（京都教育大附属高・京都教育研究科）
・高専生のＳＴＳ的視点向上への実態調査
石川聡子（大阪大学人間科学研究科）・石川寿敏（大阪府立工業高専）
・自分の意味を発信する学習の可能性
鈴木真理子（大阪大学人間科学研究科）
総合討論
・環境教育と参加型システムに対応した「科学」のあり方　高山　進（三重大学）
・環境教育・ＳＴＳ教育など総合分野の実践をめぐって　鈴木善次（大阪教育大学）

なお、これらの内容について「研究会研究報告」が日本科学教育学会から出されている。購読希望の際には研究会事務局にご連絡いただきたい。事

務局は大阪教育大学鈴木善次研究室

◇各地の自治体にみる環境学習活動

・大阪府八尾市環境部環境総務課
「BUENA　VIDA」の発行
みずとくらしをテーマにしたパンフレットで、毎月さまざまな角度から市民の環境学習活動の様子を紹介している。八尾市では生活排水アドバイザー制度を設けて「短信」の発行、河川調査、廃油処理のあり方などの活動をしており、また学校を訪れ、こども達の環境学習の手伝いもされている。学校、行政の協力体制が整っている。
（八尾市本町1-1-1、phon 0729-91-3881）

・大阪府吹田市
・「わたしたちのくらしとかんきょう」
小学校３－４年用副読本の発行、教育委員会
Ｂ５版、２７ページの冊子で、「身のまわりのごみ」「命をささえる水」「わたしたちの大気」「わたしたちのくらしと音」のテーマが含まれている。
・「いきいき吹田」（快適環境推進調査報告）Ａ４版、９６ページ、生活環境部公害対策課。この中で環境教育についての市民の意識調査がなされているが、７０％近い人が「環境教育」という言葉をしらないという結果がでている。調査はＧＥＣ環境文化研究所による。

・大阪府豊中市公害対策部対策課
第２回「身近な環境調べ発表・交流会」報告書
Ｂ５版、３９ページ。平成５年５月。
平成４年度に市内の小・中・高校生と地域で環境保全に取り組んでいる市民団体による身近な環境調査や観察の結果をまとめたもの。「土づくり」「温度調べ」「ツバメの営巣調査」「酸性雨調査」など多彩な活動が収められている。

（学会編集委員会には主として大阪近辺の情報が寄せられます。各地の活動をぜひお寄せ下さい）

●ご存知ですか？… 新聞切抜き情報誌

全国の新聞から検索した記事を整理・資料化してお届けします

月刊 切抜き 保健

定価3,090円（本体3,000円）B5判220頁25日発行
年間予約購読料35,000円（送料・消費税を含む）
※別冊季刊切抜き「福祉情報」がついて年16冊

編集内容
◆官報資料 ◆連載記事 ◆環境問題 ◆医学・医療 ◆生活・労働と安全 ◆健康と生活

環境問題
★環境保全（環境会議、環境教育）★環境行政（ゴミ処理問題、駐輪公害）★環境汚染（大気汚染（NOx、スパイクタイヤ公害、フロン・オゾン、地球温暖化、アスベスト、水質汚濁、土壌汚染、酸性汚染、騒音・振動、水俣病など）★公害訴訟★住民運動★その他

◆ご購読は、下記へお申し込みください。なお、バックナンバーもございます。

㈱アイオーエム 〒142 東京都品川区戸越1丁目12番9号
電話 03-3788-0521　FAX 03-3788-0538　郵便振替 東京6-163672